

連載5 「母の日、父の日よ！永遠に！」

重い知的障がいがある方々にとって、「母の日」や「父の日」が、私たち定型発達者と同等に、イヤ、あるいはそれ以上に意味ある存在になっているという真実は、近くで暮らしているご家族の方にとっても知らないことのように思える。

第一、カレンダーや数字、そして日付けがわからない重い知的障がいの方が、どうやって母の日や父の日の日程がわかるのかという疑問…。その次に、たとえ日程がわかったとしても（例えば、教えられて）、その意味するところ、活用の方法がわかるのかという疑問…。そして三番目には、たとえそのような意味がわかったとしても（例えば、何回も教えられて）、そのような気持ちが育つ可能性がないのではないかという疑問…。

さて、社会の常識は、現場の常識にあらずです。彼らには、どうも日程もわかるようだし、母の日や父の日が日頃の感謝の気持ちを、例えばプレゼントなどを通して伝える日であることもわかっているらしい。そして、その感謝の気持ちは、私たちが抱いているような感謝の質を越えて、より真摯な深いものであるらしい。

例えば、こんなことが起こります。一年のほとんどを途中覚醒などしないでぐっすり安眠する方が、父の日を一週間後に控えて、突然夜中に起きてきます。断続的に大きな声も出ています。抱えている障がいは最重度、身辺のことは全介助、もちろん喋ることはできません。おまけに視覚障がいと運動障がい、つまり見ることも歩くことも十分にできません。夜勤の職員も一年に一回あるか無いかの行動にびっくりです。幸い支援力の高い職員が今晚の夜勤者です。「どうして起きて来たんだろう？あれ一っ、父の日のプレゼント決まっていたっけな？確かまだ相談していないよな。お父さんの大好きな彼女だから、父の日はきっと大切だろうな。相談が遅くなったのを謝って、父の日のプレゼントのことを相談してみよう。」

そんなわけで、相談が始まります。目が見えない彼女なので、写真カードが役に立ちません。「父の日がもうすぐですね。相談が遅くなってごめんなさいね。」出ていた声が「ピタリ」と止まります。どうも話の内容は、当たっているようです。「順番にプレゼントの名前を言っていきますので、これだ！という時に教えて下さいね。」

まずは、定番の父の日プレゼントから上げていきます。「ネクタイ？」…「シーン」、「ハンカチ？」…「シーン」、…どうも違うようです。こうなれば、彼女のこれまでの人生の物語を紐解きながら当てずっぽうです。「すき焼き？」ここで彼女の手が職員の方にその姿を探っているように伸びます。「すき焼きの牛肉なの？」…強く職員を引っ張り、そして抱きついてきました。どうもすき焼きの牛肉で良いようです。「プレゼントは牛肉なんだ。おそう言えばお父さん、すき焼き大好きだったよね。よく覚えていたね。」「なかなかいいプレゼントだと思うよ。お父さんもきっと喜ぶよ」これで彼女は、またしっかりと眠りにつくことができました。

社会の常識では計れない彼女の行動、理解力、想像力、そして、やさしさ、思いやり…。さらにそれを職員に伝えたいという強い思い…。

夜中起きてくるという彼女の行動が、父の日にすき焼きの牛肉をプレゼントしたいにつながる。彼女の強い発信力と支援職員の受信力とが相まって、彼女の幸せが高まっていきます。